

アメリカ社会における階級と言葉

杉 田 雅 江

移民の歴史背景は、アメリカに独自のエスニックの世界を作りあげた。その世界は、個人が変貌しなければならない社会環境である。人がアメリカで生活するには、当然エスニック集団との融合を求められる。その激烈な多民族国家の中で、アメリカ人は、よい仕事、よりよい所得・地位を得るために苦闘している。その苦闘は、民主主義の伝統を掲げて戦われている。しかし、その表示が強化されればそれだけ逆接的に「階級」意識に捕われて生きているのではないかという疑いが、生じる。アメリカ社会における「階級」要素は、エスニック要素と同様にアメリカの社会的環境の特色として指摘されるべきである。

社会学者 Benita Eisler は、“Class Act”の中で「階級」意識について次に述べている。

The “first and only” time her grandmother ever slapped her, recalls Marietta Tree, an irrefutably upper-class citizen, related by ties of blood and marriage to almost every great New England family, was when, as a young girl, Marietta referred to an acquaintance as “middle class.”

“There are no classes in America — upper, lower or middle,” was the explanation for the severity of the lesson. “You are never to use that term again.”

But refusal to admit the existence of class in America simply means it's the subject on everyone's mind, even as they say it isn't so.⁽¹⁾

結婚による「階級」上昇は、Marietta により述べられた。その言及は、「階級」変貌を願望する人の意識を明示している。この意識こそ、「階級」存在の現実を直視させる。そして人に階層を口に出すことを控えさせる。しかし、Benita Eisler は“Class Act”の中で、“They're the kind of people who would be on the symphony board.” “She married beneath her.” My brothers have low-level ambition and jobs to match.” “You can tell immediately from their accent that they're upper class.”⁽²⁾等の表現は、「階級」社会の価値付けの表われを明示している。⁽³⁾‘symphony board’（交響楽団理事）は、人がしばしば音楽会やオペラ等を観賞できる富の特徴であり、beneath, low-level, upper-class⁽⁴⁾の如く、それらは上下階級を意味する言葉であるのは明らかである。社会学者 Richard Coleman と Lee Rainwater は、“Social Standing in America”⁽⁵⁾の中で、この上下関係を‘class arithmetic’（階級数学）と称している。それは、人が計算される階級構造の存在である。そして、社会学者 Wolfram は、1960年代に教育・職業・住居・所得に基づいた四つの「階級」を唱えた。その後、多数の学者によりアメリカの社会階級が研究されてきた。そして、近年ペンシルバニア大学のポール・フセル教授著「階級」⁽⁶⁾の中で、著者は「階級」を三つ（上流・中流・下流）に分類している。これらの研究から、社会階層がアメリカに存在していることを私達は見逃すことができない。前出 Benita Eisler 説明の如く、“You can tell immediately from their accent that they're upper class.”⁽⁷⁾は、言葉のアクセントと「階級」が微妙に関連している。それらは、複雑なニュ

アンスで反映しているが、ここで私は、アメリカ社会における言葉と「階級」がいかに深く関わっているかを検討したい。

1

第一に、「階級」にまつわる euphemism 表現を考察したい。言語学者 Philip Haward は、“The State of the Language”の中で著者が euphemism について次のように述べている。

Our modern taboos are class. We are the society that calls a second-hand car salesman ‘a used vehicle merchandizing co-ordinator’, and a fling-clerk an ‘information retrieval administrator’. We describe poor and back-ward countries as underdeveloped, then developing, then Third World, moving in mealy-mouthed sensitivity on to a new euphemism as soon as the latest one picks up offensive connotations.⁽⁸⁾

上記から、「文書整理係」を「情報引き出し管理者」,「中古販売員」のかわりに「中古調整者」,そして「低開発国」を「第三世界」と解される婉曲表現が使われる。特に、職業名に対する多数の婉曲表現の存在が国弘正雄著『アメリカ英語の婉曲語法』(下)⁽⁹⁾の中にも述べられている。これは、そのまま表現すれば相手の自尊心を傷付けるほどの不快感思考の職業意識が存在するからではないだろうか。婉曲表現への言い換えは相手に対する上下意識、つまり「階級」の反映を弱めるに違いない。人の心理的抑制を和らげる手立になるだろう。

更に、Philip Howard は、“The State of the Language”で euphemism について次のように記している。

The matter of euphemism changes from age to age and from society to society, depending on what topics are found so dangerous that they demand the substitution of a favourable ⁽¹⁰⁾ for a more accurate but offensive expression.

婉曲表現が、時代と伴に変化するのには興味深い現象である。例えば、‘housewife’を‘domestic engineer’と言い換えて使用した時代もある。その時代に、何が卑しいかの価値判断により婉曲表現が現われたり消えたりすると言えよう。

また一方、英語学者 Paul Fussel は、人が「気どり」を表わし自分の status をより高い地位に相手に示唆する使用を述べている。

cocktails than drinks
position // job
individuals // people
purchase // buy
meet with // meet
request // ask
affluent // rich
utilize // use⁽¹¹⁾

以上の例は、その「気どり」が短かい単語から長い語いに言い変えて婉曲表現が成立するのを見いだす。あえて、その中に「気どり」を含蓄させる。

更に、Fussel は気どりの婉曲表現について、次のように述べている。

The longer the euphemism the better. As a rule,

euphemisms are longer than the words they replace. They have more letters, they have more syllables, and frequently, two or more words will be deployed in place of a single one. This is partly because the tabooed Angle-Saxon words tend to be short and partly because it almost always takes more words to evade an idea than to state it directly and honestly.⁽¹²⁾

長い婉曲表現は、直接的に短かく言い表わす言葉より「気どり」があり洗練されていると考えられる。ここで注目すべきことは、禁句にされているアングロ・サクソンの言葉は短かい表現である。それで、一般人はその禁句を守っている。「英語で銀のスプーンを口にくわえて生まれてくる。」⁽¹³⁾という表現がある如く、アングロ・サクソンの出身である同一性は、アメリカ人にとって上流への道を象徴していると言えよう。その上流への道とは、アイビー・リーグの大学を卒業し、‘yuppies’ (young urban professionals) と呼ばれる安定した職業に従事することを意味している。「医者や弁護士が代表的」⁽¹⁴⁾である。この‘yuppies’を‘ones ocialc ommentator’⁽¹⁵⁾と表現する婉曲表現が現われ、それは、社会の解説者と解釈される。いかに、‘yuppies’が社会の中心人物的役割を果たしているか気が付く。それ故、アングロ・サクソン人が嫌う言葉をできるだけ避け、それに適する言葉のスタイルの模倣を人は努めるのではないだろうか。

2

社会言語学者 William Labov は、1973年ニューヨークのハアレームに住む黒人の子供の中に non-standard English (非標準英語) の存在を立証した。次に Labov が言及した non-standard English の会

話を記そう。...
 ...
 ... 'Why? I'll tell you why. ... Cause, you see, doesn't nobody
 ... really know that it's a God, y'know, 'cause I mean I have
 ... seen black gods, pink gods, white gods, all color gods, and
 ... don't nobody know, know it's really a God. An' when they
 ... besayin' if you good, you goin't' heaven, tha's bullshit, 'cause
 ... you ain't goin' to no heaven, 'cause it ain't no heaven for
 ... you to go to. ⁽¹⁶⁾

‘doen't nobody’ や ‘you ain't goin' to no heaven’ の如く二重否定, ‘ain't’, ‘nobody know’ の s が欠如するのは, non-standard English の使用の表われと考えられる。そして, こういった言葉の使用は社会言語学者 Crawford Eeagin により working class の人々の間にも発見された。更に, 言語学者 Mary Key は, デトロイト市の下流の人々に, そのような言葉使用の特徴を指摘した。また, Key は代名詞同格をきわめて使用されるのを述べている。例えば, “My brother went to the park.” は, standard English であるが, そう使われず, “my brother, he went to the park.” ⁽¹⁷⁾ と言われている事実を発見した。このような言葉の使用は, ‘socio economic status’ と相関関係がある。これらの文法的特徴は, 下流階級にみいだされる現象である。

Standard English は, ‘a context-related standard’ ⁽¹⁸⁾ と ‘a class-related standard’ ⁽¹⁹⁾ のスタイルに分類される。それは, Howard Giles と Peter Powesland によると, “Speech Style and Social Evaluation” の中で次のように述べている。...
 ...

A context-related standard is the style of speech considered appropriate in certain socially-definable situations, usually the more formal and public, and can usually be found to some degree spoken by all social groups in that culture. A class-related standard can be defined as a style of speech regarded as the most prestigious variant of the language in a given culture, largely irrespective of context, and characteristic of one social group, usually the highest in socio-economic status.⁽²⁰⁾

この‘a context-related standard’⁽²¹⁾は、人が学校で学んだ言葉で、公的に一般に受け入れられている。一方、‘a class-related standard’⁽²²⁾は、権力や経済的地位により支配される関係から生じている言葉である、例えば、医者と患者である。そして、non-standard English を使用する黒人の女性達を研究した Mary Key は、彼等の中に standard English の使用を指摘している。次に Key の言葉を記そう。

Many other studies in the past few years have documented that females in the black communities in the United States show a marked difference in their control of standard English in contrast to the males. It is not clear why this is so; a complex of reasons probably is involved. Black females may have occasion to hear and speak more standard English because of their work as domestics in homes where standard English is spoken.⁽²³⁾

黒人は Non-Standard English を使うが、女中を雇用する人は、比較的経済力があり status も上と言われている。雇用された黒人の女性

は standard English の使用を要求される。そうしなければ仕事を果たすことは不可能になる。それ故、standard English を理解できないことは失職という危機感に迫られている。この黒人女性の英語使用は、経済的権力にいかに支配されるかの証明になるに違いない。

3

言葉は、人がどの社会的階級に属しているかを明示する手掛りになると言えよう。社会言語学者 John Gumperz は、言葉は人の 'social identity'⁽²⁴⁾ の表われになると述べている。つまり、これまで考察してきた euphemism や standard, non-standard English 表現は、私達にアメリカ社会における人の 'social identity'⁽²⁵⁾ 位置付けを理解できる一助けとなるだろう。

しかしアメリカ社会で興味深いことは、人が同じ「階級」という 'social identity'⁽²⁶⁾ を維持するとは限らない。そこでは、状況が変化すれば当然言葉にも変動がみられるはずである。その移動性について、Howard と Powesland は、次のように説明している。

Because of social mobility, nonstandard speech is often found amongst people quite high in socioeconomic status. Likewise some "down-and-outs" exhibit speech characteristics usually associated with the more successful levels of society.⁽²⁷⁾

アメリカは、移動性の激しい社会である。その競争社会における人間関係、つまり、人的環境は絶えず変化を生じさせられる。人は、そういった新しい環境に対応する努力を強いられる。その場、その場で新しい言葉に直面したり、またその場に適した言葉を生み出さなければならな

い。その変動性は、アメリカ人に下流から上流へ上がる機会を与えるだろう。しかしながらその好機獲得の為に個人が創造する言葉への努力は、私達が想像する以上に強いものに違いない。

4

アメリカ社会の階級構造存在は、アメリカ人の階級に対する意識化を強化させる。階層と階層の間における人の距離間は、当然生じてくる。ここで、距離間の観点からアメリカ人の人格構造を見てみよう。

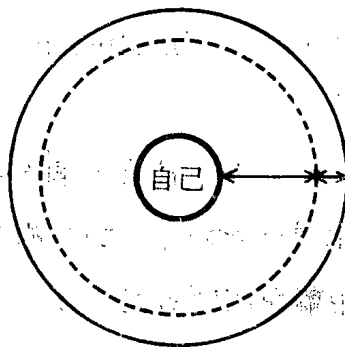


図 1 人格構造

外円は全人格を、中心円は自己を表す。点線円は線をこえて出入りすることが容易で、太線円は線をこえることがむずかしい厚いかべを表す。外円と中心円の間が社交層であるが、表層に近い方の formal な社交層を白、深層に至るまでの informal な社交層を厚色で区別した。⁽²⁸⁾

社会言語学者井出祥子の人格構造によると(日米対照丁寧表現論)「自己は厚いかべに囲まれていてアメリカ人は「相手の私的なことは遠慮するし、自分の私的なことも遠慮してもらうことを期待する」⁽²⁹⁾」ので、根本的に人と人との距離間は私達の想像以上に大きく開いていると言えよう。アメリカの教授が、学生に first name で呼ぼうと努めるのは、status の差がないのではなくその status の意識の支配的な故に、

その距離間を短かくしようとする言葉上の style の表われと考えられる。

次に挙げる例は、アメリカの会社の上役が従業員に依頼する時の場である。

Curiously, Americans use the past subjunctive in a way that does have a meta-talk meaning. To the Englishman "Would you do this?" represents a softening of the request, as opposed to "Will you do this?" To an American familiar with "polite" bosses, it is just the reverse: "Would you?" is a command; "Will you?" implies a choice.⁽³⁰⁾

図1の人格構造により、アメリカ社会の個と個の距離は、明らかに一般に大きく開いているのに気がつく。この例は上役と従業員との「階級」差は、なお一層その距離を広げるだろう。それ故、その権力的に大きく開いた距離を隠すために、そのボスは従業員に対して丁寧な言葉を使うことを試みたのであろう。それは会話における一種の style と思われる。アメリカ社会の階級的な距離を現実的に表わさず、建前上の平等の為に距離を隠すために権力のある上の人が、下の人に対して「ていねいな」表現を使用した。

新しい場に対応するために、新しい言葉を創り出すアメリカ人は、その言葉を生み出す時に style というものにかなり依存している気がする。社会言語学者の Hymes は、style を 'protean'⁽³¹⁾ (変化きわまりない。ひとり数役を演じる。) と呼んでいる。アメリカ人の「階級」意識は、style を生み出したに違いない。その意識故に、言葉上の工夫を努める。例えば、⁽³²⁾ "Speech styles are simply ways of speaking." のように、人は、⁽³³⁾ "Oh, that's just his / her / my style" と良く言

う。‘speech style’とは、会話上に行なわれる様々な技巧的変化である。その‘speech style’により「階級」存在は、隠されてしまうかもしれない。

アメリカでは、言葉は lip service（口先だけの賞賛）の性格を持っている以上、根底の「階級」意識は当然‘speech style’により隠されるだろう。それで、その階級はその人の言葉以外のものに表示されるのは、明らかである。つまりその人の social behavior と social status が一致している場合が多々ある。

5

激しく変わる社会構造を持つアメリカには、当然流動的な人間関係が生まれる。それは、きちんとルール化されていない人間関係ということもできる。

On the basis of these and other examples of convergence, I theorize that this elaboration of speech patterns among nonintimates is reflective of the dynamic of our social structure. If it were not for the great potential for social mobility in our society, there would be very little reason for people to negotiate in the way they do. We know from the anthropological literature that traditional societies contrast sharply with the bulge pattern just described. In more traditional societies, all relationships are much more fixed; people know where they stand with everyone. On the other hand, there is much less potential for social mobility. My findings on speech-act behavior may provide insight into the

way speech reflects and perpetuates differences in social structure.⁽³⁴⁾

中流のアメリカ人が上流へ上がるには、style を学び取る。この style と「階級」意識が同じ意味である。アメリカ人は、民主主義の基で平等な生活をしていると言う。しかし、その言葉が何度も繰り返えられるのは、アメリカ人ほど自分達の素姓を意識化している国民はいない。この「階級」意識は、建国から自由と平等を追求してきた人達の相剋の表われである。そしてその相剋は、人々にある種の不安さえ与えている。

不安定で敏速な「階級」間移動により、「言葉というのは、アメリカでは洋服のようなもので、その日その時によって、時と場合に応じて替えるものになっている」⁽³⁵⁾ アメリカでは、人の言葉が絶えず変化を要求される。時折アメリカ人は、どんな言葉を使用すべきか予想できない。その予想は、困難である。ここで英語は通じるのだろうかという懸念さえ人はいだくであろう。言葉は「洋服」のようなものであると言えよう。

<註>

- (1) Eisler, Benita. *Class Act* (Franklin Watts, 1983) p. 9.
- (2) *ibid.*, p. 9.
- (3) *ibid.*, p. 9.
- (4) *ibid.*, p. 9.
- (5) Coleman, Richard and Rainwater, Lee. *Social Standing in America* (New York : Basic Books, 1978) p. 3.
- (6) Fussell, Paul. *Class* (Ballantine Books, 1983).
- (7) Eisler, Benita. *Class Act* (Franklin Watts, 1983) p. 9.
- (8) Howard, Philip. *The State of the Language* (Oxford University Press, 1985) p. 101.
- (9) 国弘正雄『アメリカ英語の婉曲語法』(下)(ELEC 出版部, 1975).
- (10) Howard, Philip. *The State of the Language* (Oxford University Press,

1985) p. 101.

- (11) Fussell, Paul. *Class* (Ballantine Books, 1983) p. 189.
- (12) *ibid.*, p. 187.
- (13) 板坂元『アメリカを読む』(旺文社, 1985) p. 136.
- (14) ニューヨーク通信『英語教育』(大修館, 1986年11月号) p. 25.
- (15) Shapiro, Fred. *Yuppies, Yumpies, Yaps, and Computer-assisted Lexicology* (American Speech volume 61, summer 1986) p. 139.
- (16) Brown, Gillian. *Teaching Talk* (Cambridge University Press, 1984) p. 23.
- (17) Key, Mary. *Male / Female Language* (The Scarecrow Press, 1975) p. 105.
- (18) Giles, Howard & Powesland, Peter. *Speech Style and Social Evaluation* (Academic Press, 1975) p. 15.
- (19) *ibid.*, p. 15.
- (20) *ibid.*, p. 15.
- (21) *ibid.*, p. 15.
- (22) *ibid.*, p. 15.
- (23) Key, Mary. *Male / Female Language* (The Scarecrow Press, 1975) p. 105.
- (24) Gumperz, John. *Discourses Strategies* (Cambridge University Press, 1982) p. 39.
- (25) *ibid.*, p. 39.
- (26) *ibid.*, p. 39.
- (27) Giles, Howard & Powesland, Peter. *Speech Style and Social Evalnation* (Academic Press, 1975) p. 21.
- (28) 日米対照丁寧表現論 『英語教育』(大修館, 1973年12月号) p. 20.
- (29) 同上, p. 20.
- (30) Nierenberg, Gerard and Calero, Herny. *Meta-Talk* (Cornstone Library, 1981) p. 22.
- (31) Tannen, Deborah. *Conversational Style* (Georgetown University, 1984) p. 8.
- (32) *ibid.*, p. 8.
- (33) *ibid.*, p. 8.
- (34) Wolfson, Nessian. *Research Methodology and the Question of Validity* (TESOL Quartely Volume 20, December 1986) p. 694.
- (35) 板坂 元『アメリカを読む』(旺文社, 1985) p. 207.